

中齋塾 東京フォーラム  
平成24年 第3回講話

平成24年4月14日  
於 湯島聖堂

先日の五周年記念式典は満席で、有難うございました。湯島聖堂側も驚いておりました。式典の時に体調を崩した人がおられて、医療班の対処で事なきを得ました。お礼を述べようとずっと思っていたのですが、今まで忘れていました。でも協力して下さった方の顔を見た瞬間に思い出しましたので、まだボケてはいないと感じました。

この間、アルツハイマーに関する日本の医療最先端の講演会が東大であったので出掛けて来ましたが、内容はちんぷんかんぷんでした。少し分かった所では、アルツハイマーの人は当たり前のように幻覚が見えるという事です。

「マーガレット・サッチャー鉄の女の涙」というイギリス元首相の映画を見て来ましたが、映画の中で亡くなられたご主人と幻覚だと分かっているながら、「亡くなったのにうるさいわね」と普通に幻覚の御主人と会話をしていました。その映画の中では、まだらぼけで多少正気に戻ることがあるが、サッチャーさんは昔のように他の人に指示を出して、しばらくすると本人はケロッと忘れてしまうと描かれていました。

幻覚を見るのは当たり前だと周りが承知をしていれば、それなりの対応が出来ると感じます。

アルツハイマーを研究しているお医者さんの話だと、誰でもアルツハイマーになる可能性はあるそうです。この頃私は物忘れが増えてきたので、氣をつけないといけないなと思っていましたが、今朝方ビジネスホテルのお風呂から出る時に眼鏡がない事に氣付き、フロントに問い合わせたら、フロント側から眼鏡だけ無くなるのはあり得ないと不信感の目で見られつつ、しばらく押し問答を繰り返していましたが、仕方がないので新しい眼鏡を作ろうと思い、非常に不便でしたが眼鏡のないまま食事をとりました。このような講演を聞いてばかりいましたので、もしかしてアルツハイマーが自分の身に起きたのではないかとヒヤヒヤしていた矢先、フロントから眼鏡が見つかりましたと連絡がありました。良かったと思いつつ、フロントにどこにあったのかと聞いたら、他の人が間違えて持っていたそうです。何だ、ボケたのは私ではないと胸をなでおろした次第です。

色々な知識が混ざって来るとつい余計な事を考えてしまいますが、今回のテーマ本質・大局・歴史これをいかに身につけるかで色々な事象の対処は出来るかと思います。

一つの現象が起きましたら、この本質は何かと突きつめて考える癖をお持ちになると良いでしょう。

お礼を言わなければならない事、何をするのかを人様の顔を見た瞬間にポンと浮かぶ

というのは良い事ですし、渋沢栄一流の論語を活用しているのだと実感が湧きました。

今日論語を素読した所は、渋沢栄一著『論語講義』の冒頭に「私は論語を現代の世の中に活かすように読む。従って現代に役に立たない所は飛ばします。でも飛ばすと色々と問題がありますので、学者が解説するような感じでサラッと流します」と書いてあります。

私は今回の章を読んでいますが、なかなか通じない所もあり面白味を感じません。現代にまったく関係ないとは言いませんが、二千数百年前の礼儀作法ですから、通じない所もあります。

では、論語の解説を致します。

### 『郷党第十』

郷党というのは、郷里、村という考えです。

【一】孔子 郷党に於ては、恂恂如たり、言うこと能わざる者に似たり。其の宗廟 朝廷に在りては、便便として言う、唯 謹むのみ。

孔子が村の中で、近所の人達と話す時には実直な人柄で対応する。先祖の御霊屋ではすらすらと話をされています。その時の態度は謹厳実直な態度。孔子はそのような雰囲気です。

【二】朝にて下大夫と言うときは、侃侃如たり。上大夫と言うときは、誾誾如たり。君在すときは、蹶蹶如たり、与与如たり。

朝廷の帰りに目下の人と話す時には、和やかで穏やかな雰囲気。同役の人と話す時には、ほどよく争わずに話す。今の民主党をみると大臣同士で足の引っ張り合いをするのは、どうしたものかと、この章を読んでいると頭に浮かびます。主君がおられる時には恭しい態度。足の運びもゆったりとして、そのような動作を意識している。

【三】君 召して擯せしむるときは、色 勃如たり、足 躩如たり。与に立つ所を揖するときは、手を左右にす。衣の前後、襜如たり。趨り進むときは、翼如たり。賓 退くときは、必ず復命して曰く、賓 顧みずと。

主君が孔子を呼ばれて国賓の接待役を命じました。命じられた時に大役を仰せつかったので顔色がサッと変わった。普通はなかなか顔色など変わりませんから、孔子は意識して顔色を変えたのでしょう。足も纏れるような、ためらいがちにゆっくりゆっくり歩く。中国の人は手を上に組んで会釈する。手を左右に動かします。衣が揺れてもそれをきちんとさばく。右側の人は来賓の意向を聞く役。左側の人は実行役です。翼如は鳥が威嚇する姿をあらわすのですが、肘を張って恭しく歩く姿を翼如といいます。来賓が帰られる時には孔子はお見送りをして、来賓が後ろを振り返らず帰られたというのを見届けて、ご主君に報告した。

前にも話しましたが、二松学舎の理事長が吉田茂さんとお会いした時に冷汗をかいたことがあると言っておられました。吉田茂さんは二松学舎の舎長をしていた時があり、理事長が邸宅にお邪魔して帰られる時に、門から出て見送って戴き帰りの車が門の曲がり角まで差しかかる時、何気なく後ろを振り返ったら、まだ見送って戴いていたので、その時には冷汗をかいたそうです。その話を石川梅次郎先生にしましたら、高貴な人は振り返らないものだよと仰られていました。

【四】公門こうもんに入いるときは、鞠躬きくきゆうじよ如いたり、容ようれられざるが如ごとし。立たつときは門もんに中ちゆうせず。行ゆくときは闕けつを履ふまず。位ゐを過かぐるときは、色しき勃ぼく如きくきゆうじよたり、足あし躓おまりたり、其そのの言いうこと足あらざる者ものに似にたり。齊さいを擗おけて堂どうに升のぼるときは、鞠躬きくきゆうじよ如いたり、氣きを屏へいめて息いきせざる者に似にたり。出ででて一いっ等とうを降くだるときは、顔色しよくまうじよを逞たくまべて怡い怡い如ごとたり。階かいを没めして趨きうり進しんむときは、翼よく如じよたり。其そのの位ゐに復かえるときは、蹶けつ蹶けつ如ごとたり。

宮殿に入る時には身を屈めてそっと入る感覚。門の真ん中には立たないで行く。闕を踏まないのは礼儀作法ですので、またぐ。君主が決まって座られる所は、顔色を変えて、足もためらいがちにゆっくりと歩く。相手の権威に合わせて、言葉も少なくなる。袴の裾を持ちあげて、(日本の袴とは違います。またちょっと違いますが、韓国の民族衣装を想像すると良いです) 君主の居られる堂に登る時にはそっと登ってゆく。息をしていない様な態度で接する。退出をする時に階段を一段一段降りる時には緊張を緩める。階段を降りきって小走りで進む時には、恭しく進む。元の位置に戻られると時には恭しく戻られる。

【五】圭けいを執とるときは、鞠躬きくきゆうじよ如たたり、勝かちえざるが如ごとし。上あがるには揖ゆうするが如ごとく、下さがるには授さづくるが如ごとし。勃ぼく如きくきゆうじよとして戰せん食じよくあり。足あし蹶けつ蹶けつとして循しゆんうもの有あるが如ごとし。亨きやう礼らいには容よう色しよく有あり。私し覲じんには愉ゆ愉ゆ如ごとたり

圭というのは玉で作った杓です。杓といのは聖徳太子が持っていたようなものです。その杓は軽いのですが、身を屈めて、その重みに耐えられない様な持ち方をする。持ちあげる時には他人に挨拶をする様にし、下げる時には物を捧げている様に丁寧に行く。顔色が変わって、畏れおののくようにした方が良い。足は小刻みに、つま先をあげつつすり足で歩く。能などの歩き方の動きはこの辺からきているようです。享礼というのは主君からの贈り物。隣国の主君からの贈り物、個人的には顔色がほころんで愉快そうである。

## 今回の紹介書籍

『老いの才覚』曾野綾子著

曾野綾子さんの本を読んで良いなと思ったのは、「私はお金が好きだけれども、沢山あると困るものですね、自分の同級生のお兄さんが、親からの遺産を守るため四苦八苦している。そんな人生は嫌だな、そこそこがいいね」とありました。本人が思っている「そこそこ」は、今日はどうなぞが食べたいと思ったら食べれて、温泉に行きたいと思ったら行ける。お金と時間と体力がある人生が良いし、旦那がボケたら引導を渡すという夫婦関係であると良いなとも書いています。

今日雨が降っていたので傘を差しましたが、曾野綾子さんの本の中に、「傘ひき」、「傘かしげ」という江戸しぐさを最近の人は知らなくなっているとありました。「傘かしげ」というのは相手の人とすれ違う時に、ちょっと傘を傾けて相手に雨のしずくが落ちないようにする事です。

今日何気なく歩いていて、向うから年配のご婦人達が来るので、傘かしげのチャンスだと思い、意識して傘かしげをしたのですが、ご婦人たちは堂々と傘を開いたまま歩いて行きました。傘かしげはしませんでした。

曾野綾子さんの本は面白く、役に立つ事がいっぱい書いてあります。

## 欠嘴不可債

記念式典の出席者に、欠嘴不可債の意味を教えて欲しいと云われ辞書で調べましたけれど、よく分かりませんでした。その人はテレビでみて良いなと思い「行動重視、余計な事をさえずるよりは、行動を重んじなさい」との解説が氣にいったようですが、それで本当に正しいのか分らなかったの、私に聞いた次第です。

中斎塾の参与は、長い間中国と貿易をしておられるので中国には強い為お聞きしましたが、なかなかピタリとしたものがなく、その事務所に中国の人が働いているので聞きましたら、この頃はあまり使わなくなっているとの事で、あまり上品な言い方ではないそうです。

欠嘴不可債は格言です。欠嘴は、嘴が欠けると人様に言っではいけない事をポンポンと言って響感をかう。悪口、噂話をするのはいけないと言う事です。不可債は、借金はするな。直訳すると、「人様の悪口を言うのは罪が重い、ありもしない事をでっち上げたりするのは罪が重い。だけれども、もっと罪が思いのは借金をする事」

中国の客家で使われている言葉です。客家の華僑の人達の中で、借金はとにかく避け、自助努力で頑張りなさいという格言です。

ちなみに、欠（けつ）と私は何気なく読んでいましたが、辞書で調べたら「けつ」と読むのは誤りで、もともとは「けん」と読む。ただ、今では「けつ」という読み方が普及しているのでそれも読みますとありました。あと、欠という一文字であくびと読みます。

人から質問されて、色々調べていたら新しい発見がありました。

人に聞かれて分からない事はたくさんあります。でも色々な人脈を使って人に聞くというのは良いでしょう。聞かれた時に大事な事は、分からないものは分からないと素直にいえる人。その次に、分らなかつたら他の人に聞く、専門家に聞く。そうして自分自身で人格を磨き、自分の知らない事を聞かれた時には素直に言える自分を作り、尚且つ教えてくれる友人知人を意識して作っておく必要があります。自分の知り合いに専門家がいるのは良い事でしょう。

### 恒例の質問

- この一週間嘘をつかなかった人
- この一週間良い日だったと思う人
- この一週間なんらかの健康法をしていた人
- 有難うと言ひ、言われている人
- 寝る時に明日は良い日だったと過去形で眠りについた人

ものの見方が変わります。木内さんの知人で面白い人がいます。外国で大きな会社のトップをやっていた人ですが、汗を掻く、ものを書く、恥をかく、未来を描く「この4つのかく」が人生で必要な事だと言われました。

### 本質を見る時

今巷の話題ですと、北朝鮮がミサイルを発射し一瞬にして瓦解させてしまった。

ミサイル発射の理由は何か、米韓はミサイル発射をした事をすぐ発表したのに、日本政府は何故すぐ発表しなかったのか。北朝鮮のミサイル開発費用 690 億円はどこから捻出されているのか。

何故という疑問を持ち、自分なりに追及して掘り下げてゆくのが、本質をつかむコツです。

新聞を読んでいて恥ずかしいのが、それぞれの大臣が罪のなすり合いをし責任の逃れあいをしているという記事が、朝日新聞で出ていました。北朝鮮の権力争い、権力を掌握する為の手段として活用するのか、アメリカとの外交をどう展開をしようかと使っている。何故というのを突きつめてゆけば本質にあたります。

新聞を読む時、本質を見る時、疑問に思ったら何故と自分で考える。その次には、その道の専門家に確認を取る。その様な作業をすると本質が見えて来ます。

これは木内信胤先生の総合的直感力に繋がります。何故というのを、とことん突きつめてぶつかり、そして掘り下げていかないとカチンとあたりません。面白いもので、全然思っていない違う知識が融合します。これは総合的直感力のなせる技です。

自分の心の中でこの問題は何故かと突きつめてゆくと思いもかけない所からポンと情報が入り、今まで悩んでいたのが分かる。そして納得できるという行動になります。

一つの知識を追い詰めていき、その核まで達すると全然違う知識が一気に流れ込んできて、別のものを生み出す。それが総合的直感力で、だいたい正解です。本質を問い詰めてゆく時の方法です。

京都で暴走車両のニュースがありました。これも本質論で考えていきたいと思います。報道でそれぞれの人が話していますが、話がみな食い違っています。

本質・大局・歴史の大局でみると、別々の立場からたって物事をみる。大局でみる最初は、てんかんの発作で人がはねられて亡くなった。そうすると、てんかんの発作でどのような現象を本人にもたらせているのか。家族、会社はどこまで話、知っていたのか。他の報道では、会社側は本人の持病は知らなかったという話が出ていました。もしかすると、その会社のトップにまで話が言っていなかったのか、その下の部下の所で握りつぶされていたかも知れません。しかし繋がっていたかも知れません。報道だけでは分かりません。医者立場ではどうか。医者は危ないから運転は禁止だと家族、本人に再三話していた。では行政の立場でみるとどうだろうか。何で、持病を持っている人の運転の条例を作らないのかという話に変わってきます。

一つの事故、事件が起こった場合に色々な立場でみますと、日本の国の法律はどうなっているのかという事に繋がり、行政は、政治家は、とそれぞれの立場で色々なものが見えてきます。それらの立場で見た時に、自分自身はこうするべきだという解決が見えてきます。

その解決策が見えた時には、見識になります。

色々な情報は知識で、その色々な情報を集めて自分なりに、こうだと言えるのが見識です。その見識は、先程の総合的直感力で導き磨かれたものであれば誰憚ることなく大きい旗をかざして、世間に物申して出すべきです。そのうえに実行力を伴った見識は胆

力と言います。

昨日今日の新聞を見てそのような事を考えています。

ただ、日本に原発が必要なのかどうなのかを考える時に、それぞれの立場で色々な角度で話していますが、日本にとって何が必要なのか、それもこれから5年後10年後どのようなエネルギーが必要かと考えると、今の原発の方向性が自分でみえてくる。何となく今、耳触りが良いのは橋下大阪市長の言葉です。それがまた時代の流れを引っ張ってゆくのでしょう。

自分なりの考えを持つというのは、先ほど申し上げた知識、その知識をまとめ本質論をつめてゆくと自分なりの考えがポンと浮かんでくる。決して、理屈を積み上げて結論を出すものではありません。

原発という問題も深く掘り下げてゆけば、自分なりの考えに到達します。その考えに似たような性質のものを見付けていけば良いと思っています。